

アバール語における動詞の進行相形の形成方法*

山田 久 就

1. はじめに

本稿ではアバール語の動詞の進行相形の作り方に焦点を当てる。アバール語はダゲスタン諸語（北東コーカサス諸語とも呼ばれている）に属し、主にロシア連邦ダゲスタン共和国で話されている。アバール語の動詞は、過去時制、現在時制、未来時制などの時制とともに進行相や結果相などの相の区別を持っている。過去時制、現在時制、未来時制の区別は動詞の屈折語尾（接尾辞）で表されるが、進行相や結果相は本動詞の非定形と補助動詞として存在動詞の AM-uk'ine 「ある、いる」を組み合わせることによって複合的に表現され、それぞれの時制に進行相や結果相を表す形があり、その時制は補助動詞の AM-uk'ine の時制で表される¹。進行相で使われる非定形は形容詞的

* 標準アバール語の文語で用いられている文字はキリル文字であるが、ラテン文字へ次のような転写を行って、標準アバール語を表記している。a=a, б=b, в=w, г=g, гъ=ǧ, гь=h, гI=ǧ, д=d, е=e, ж=ǰ, з=z, и=i, й=j, к=k, къ=q', къ=ǧ', кI=k', л=l, лъ=ǧ, м=m, н=n, о=o, п=p, р=r, с=s, т=t, тI=t', у=u, ф=f, х=x, хъ=q, хь=ǧ, хI=h, ц=c, цI=c', ч=č, чI=č', ш=š, шI=šš, ъ=è, ю=ju, я=ja, ъ='。アバール語で使われているキリル文字のラテン文字への転写には標準的な方法が確立しておらず、ここでの転写法は筆者独自のものであることをお断りしておく。本稿で用いる省略記号は次の通りである。ABS: absolutive (絶対格); AM: agreement marker (一致標識); APRT: Adjectival participle (形容詞的分詞); F: female (女性); FUT: future (未来); M: male (男性); PRS: present (現在); PST: past (過去)。本稿は文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 (C)), 研究課題: 『アバール語における動詞+動詞型の複合動詞に関する総合的研究』, 課題番号: 23520484, 研究代表者: 山田久就, 研究期間: 2011 年度~) から助成を受けている研究の成果の一部である。

分詞である。形容詞的分詞とは関係節すなわち名詞を修飾する節で使われる動詞の形である。アバール語の関係節では定形動詞が使われることはなく形容詞的分詞が使われる。英語でも関係節で使われる -ing で終わる形式に存在動詞 to be を組み合わせて進行相を表現するので、進行相の表現方法に関してアバール語と英語は似ている。(1)はアバール語の進行相の例である²。

- (1) he-j ʔod-ule-j j-ik'-ana
 その人-F,ABS 泣く-APRT,PRS-F F-いる-PST
 「その女の人が泣いていた」 [MP2-K, p. 189]

(1)では動詞 ʔod-ize「泣く」の進行相を表現するために ʔod-ize の形容詞的分詞の現在時制形が補助動詞である AM-uk'-ine といっしょに使われている。定形動詞の過去時制形、現在時制形、未来時制形に平行して形容詞的分詞にも過去時制形、現在時制形、未来時制形がある。Saidov (1967: 780), Madieva (1980: 112, 114-116), Alekseev & Ataev (1998: 60)は、形容詞的分詞の現在時制形と AM-uk'-ine を組み合わせて進行相を表すと述べている。しかし、アバール語のテキストを読んでいると、形容詞的分詞の未来時制形と AM-uk'-ine の組み合わせで進行相が表されている文を目にすることがある。(2)はその例で、動詞 ʔod-ize「泣く」の進行相形が形容詞的分詞の未来時制形と AM-uk'-ine の組み合わせでできている。

- (2) He-j ʔod-ile-w w-uk'-ana
 その人-M,ABS 泣く-APRT,FUT-M M-いる-PST
 「その男の人が泣いていた」 [ShM1-Ts, p. 21]

¹ 動詞を例示する場合には不定形で示し、語幹と不定形を示す接辞の間にハイフンを入れる。

² 例文には訳の後に引用した本を略号で示している。略号は「調査に使用したアバール語の本とその略号」を参照。

しかしながら、進行相を表すのに形容詞的分詞の現在時制形の他に未来時制形が AM-uk'-ine との組み合わせで使われることがあることは私が知る限り記述されていない。そこで、本研究では、アバール語で書かれている 18 冊の本を用いて、形容詞的分詞の未来時制形と AM-uk'-ine の組み合わせによる進行相形について調査を行った³。この 18 冊の本から形容詞的分詞の未来時制形と AM-uk'-ine の組み合わせで進行相が表されている例を全て抜き出すと、この組み合わせで進行相を表す動詞はかなり限定されることがわかる。本稿では、進行相を表すのに形容詞的分詞の未来時制形が使われるのはどのような動詞であるのかについて述べていく。

本題に入る前に、ここで、アバール語の動詞の構成について述べておく。アバール語の動詞は語幹と屈折語尾（接尾辞）からなるが、母音で終わる語幹を持つ動詞と子音で終わる語幹を持つ動詞がある。不定形が aze, oze, uze で終わっている動詞の語幹はそれぞれ a, o, u という母音で終わり、-ze が不定形を表す接辞である。一方、不定形が子音の後に ize, eze, ine, ene が続いて終わっている動詞は子音で終わる語幹を持っていて、-ize, -eze, -ine, -ene がそれぞれ不定形の接辞である。不定形の接辞が違っていると他の変化形の接辞も違ってくるので、子音終わりの語幹を持つ動詞が取る屈折語尾の四つの型に名前をつけることにする。不定形の接辞が -ize, -eze, -ine, -ene である屈折語尾の型をそれぞれ I 型, E 型, IN 型, EN 型と呼ぶことにする。たとえば、I 型, E 型, IN 型, EN 型の屈折語尾を取る動詞の定形の現在時制形の屈折接辞はそれぞれ -ula, -ola, -una, -ona, 定形の未来時制形の屈折接辞は -ila, -ela, -ina, -ena となる。形容詞的分詞の現在時制形と未来時制形は定形の現在時制形と未来時制形の最後の母音 a を落として、e-AM を付けるので、I 型, E 型, IN 型, EN 型の動詞の形容詞的分詞の現在時制形はそれぞれ -ule-AM, -ole-AM, -une-AM, -one-AM, 未来時制形は -ile-AM, -ele-AM,

³ 調査に使用した 18 冊の本は「調査に使用したアバール語の本とその略号」に列挙している。

-ine-AM, -ene-AM となる。I型の屈折語尾を取る動詞 ab-ize「言う」を例にすると、定形の現在時制形と未来時制形はそれぞれ ab-ula と ab-ila となり、形容詞的分詞の現在時制形と未来時制形はそれぞれ ab-ule-AM と ab-ile-AM となる。母音終わりの語幹を持つ動詞では定形でも形容詞的分詞でも現在時制形と未来時制形が同じ形をしていて、形から現在時制と未来時制を判断することはできない。たとえば, ʔa-ze「知る」は、定形の現在時制形と未来時制形はともに ʔa-la となり、形容詞的分詞の現在時制形と未来時制形はともに ʔa-le-AM である。

2. 自動詞対他動詞

私が調べたアバール語の全テキストにおいて進行相形動詞が15,500例ほど使われている。母音で終わる語幹の動詞は形容詞的分詞の現在時制形と未来時制形が同じ形をしているので、進行相形動詞が形容詞的分詞の現在時制形を使っているのか、形容詞的分詞の未来時制形を使っているのかを区別できない。約15,500例の進行相形動詞のうち、母音終わりの語幹を持つ動詞は1,500例ほどである。したがって、約14,000例の進行相動詞が形容詞的分詞の現在時制形を使っているのか、未来時制形を使っているのかを区別することができる。そのうち形容詞的分詞の未来時制形を使っているのは、647例である。すなわち、形容詞的分詞の未来時制形を使っている進行相形動詞は5%程度であり、大多数の進行相形動詞は形容詞的分詞の現在時制形を使っていることになる。

どのような動詞の進行相形が形容詞的分詞の未来時制形を使っているのかというと、まず言えることは、全てが自動詞であるということである。他動詞の進行相形は全て形容詞的分詞の現在時制形を使っている。アバール語は自動詞としても他動詞としても使われる動詞がとても多くあるので、進行相形で使われている他動詞の例が全体でどのくらいあるのかは数えていないが、個別の動詞では、形容詞的分詞の現在時制形を使っている進行相形が50

回以上使われている他動詞には、AM-aq-ize「出す、はずす」、AM-ač-ine「運ぶ」、AM-ic-ine「言う、伝える」、AM-os-ize「手に取る」、ab-ize「言う」、ah-ize「叫ぶ、呼ぶ」、hiq'-ize「尋ねる」、ha-AM-ize「する」、ʔ-eze「与える」、ʔ-eze「置く」、rex-ize「投げる」、rik'k'-ine「数える、見なす」、t-eze「残す」、t'am-ize「配置する、～させる〈使役〉」、c'al-ize「読む」、c'un-ize「守る」がある⁴。これらの動詞は形容詞的分詞の未来時制形を使っている進行相形では使われていない。

アバール語には、自動詞と他動詞の中間的な動詞に経験者が与格あるいは第一位格（「～の上で」を意味する形）で現れる二項動詞がある。こうした動詞を斜格経験者動詞と呼ぶことにする。斜格経験者動詞の二つ目の項は名詞であれば絶対格になる。AM-oʔ-ize「好く、欲する」は経験者を与格で取る。AM-iç-ize「見える」、raʔ-ize「聞こえる」、AM-ičč'-ize「わかる」は経験者を第一位格で取る。k'-eze「～できる」は第一位格の経験者と不定形の動詞を取る。AM-oʔ-ize「好く、欲する」、AM-iç-ize「見える」、raʔ-ize「聞こえる」、AM-ičč'-ize「わかる」、k'-eze「～できる」は全て進行相形で50回以上使われているが、全て、形容詞的分詞の現在時制形を使った進行相形である。

このように、形容詞的分詞の未来時制形を使った進行相動詞の大きな特徴として、自動詞に限定されることが挙げられる。

3. 自動詞

前節で述べたように、自動詞だけが形容詞的分詞の未来時制形を用いて進行相形を作っている。しかし、あらゆる自動詞の進行相形が形容詞的分詞の未来時制形を用いているわけではない。自動詞である AM-alah-ize「見る」、AM-aq-ine「出る」、ʔagarʔ-ize「近づく」、ʔuh-ine「起こる、移動する」、urğ-ize

⁴ ここに挙げた動詞のいくつかは他動詞としても自動詞としても使われるが、他動詞として使われている例だけを数えている。

「考える」, xw-eze 「死ぬ」, cik'k'ine 「増える」, čwax-ize 「流れる」, č'eze 「立ち止まる」, ššw-eze 「到着する」はどれも50回以上進行相形で用いられているが、全ての例で形容詞的分詞の現在時制形が使われている。以下では、どのような自動詞が進行相形で形容詞的分詞の未来時制形を用いているのかを見ていく。

3.1 反復擬音動詞

アバル語は擬音語を結構多く使う言語である。いろいろな擬音語動詞があるが、最も一般的なタイプとして、 $C_1V_1C_1V_1d$ -ize あるいは $C_1V_1C_2C_1V_1d$ -ize あるいは $C_1V_1C_2C_1V_1C_2d$ -ize の形をしている擬音語あるいは擬態語と考えられる動詞がたくさんある (Madieva 1980: 103-104, Alixanov 1994: 131-132)。C は子音を、V は母音を表し、C、V に添えられた数字は同じ数字が添えられた音素は同じ音素であることを示している。たとえば、gargadize 「しゃべる」, q'waq'wadize 「(ラッパなど)が鳴る」, ššurššudize 「ささやく、(葉っぱなどが)さらされと揺れる」, kwalkwadize 「ゆれ動く、(何かに対して)目や手をしばらく動かす」。C₂として現れる子音は、l, r, n, m が多く、この四つの音素は $C_1V_1C_2C_1V_1C_2d$ -ize の形で二度目に出てくることは少ない。C₂が l, r, n, m 以外の子音であることは少なく、C₂が l, r, n, m 以外の子音である場合は $C_1V_1C_2C_1V_1C_2d$ -ize のように C₂ は繰り返される。こうした動詞は音や音から連想される動きを表しているので、いろいろな意味で用いられることが多い。このタイプの動詞を本稿では便宜的に反復擬音動詞と呼ぶことにする。反復擬音動詞は全て自動詞である。進行相を表すのに形容詞的分詞の未来時制形を用いている動詞の中に反復擬音動詞が多く見られる。反復擬音動詞で進行相形で現れている動詞を全て挙げると、kwalkwadize (20:10), gargadize (12:8), ženžedize (8:4), ğulğudize (3:4), ššurššudize (3:1), q'aq'adize (3:0), parpadize (2:1), swerswedize (1:2), q'waq'wadize (2:0), řurřudize (2:0), sunsudize (2:0), c'ac'adize (2:0), č'wač'wadize (2:0), rurudize (1:1), řurřudize (1:1), xarxadize

(1:1), çimçidize (1:1), pupudize (0:2), helhedize (0:2), girgidize (1:0), qırqıdize (1:0), qulq'udize (1:0), nunudize (1:0), tartadize (1:0), tultudize(1:0), ç'warç'wadize(1:0), çč'ič'č'i'dize(1:0), šuršudize (1:0), bubudize (0:1), himhidize (0:1), ŷerŷedize (0:1), qunqudize (0:1), çulçudize (0:1), hihidize (0:1), c'unc'udize (0:1), çapçapdize (0:1), çulçudize (0:1) である。それぞれの動詞に付けられた括弧の中の数字 $x : y$ は x が進行相形が形容詞的分詞の未来時制形を使って表現されている数で y が現在時制形を使って表現されている数である。動詞が並んでいる順序は進行相形の数が多い順で、進行相形の数と同じ場合は、形容詞的分詞の未来時制形を使った例の数が多い順である。以下でもいろいろな動詞を列挙するが同様の方法で動詞を列挙することにする。進行相形で使われている反復擬音動詞は 37 動詞であるが、そのうちで、形容詞的分詞の未来時制形と現在時制形の両方を使って進行相形を表しているのは 11 動詞、未来時制形だけが 15 動詞、現在時制形だけが 11 動詞である。全ての反復擬音動詞をまとめると、進行相形に形容詞的分詞の未来時制形を用いているのは 75 例 (61%) であり、現在時制形を用いているのは 47 例 (39%) である。したがって、未来時制形と現在時制形の相対的な使用頻度に大差はないと言える。

3.2 持続動詞

アバール語には、基本となる動詞から作られ、「しばらく～する」、「繰り返し～する」、「～することに従事する」というような意味を持つ一群の動詞が存在する。こうした動詞を持続動詞と呼ぶことにする。基本となる動詞から持続動詞を作る方法としては、動詞の屈折語尾の型を変更したり、基本となる動詞の語幹に接尾辞を付けたりすることがある (Madieva 1980: 102-104, Nurmagedov 1992: 142-156, Alixanov 1994: 130-131, Alekseev & Ataev 1998: 58-59)。屈折語尾の型を変更する場合、I 型あるいは IN 型を E 型に変更することしかない。一方、基本となる動詞に付加される接尾辞は -d, -ar, -anq などいくつか存在する。接辞 -d が付いてできた持続動詞は単語によっ

てI型の屈折語尾を取るものとE型の屈折語尾を取るものがある。それ以外の接尾辞が付いてできた持続動詞はどれもI型の屈折語尾を取る。どのような形で持続動詞が作られるかは音韻的な特徴などで多少の傾向はあるが、基本的にはそれぞれの単語に依存していて、方言間でかなりの違いがあるし、標準語内でも方言に由来する地域差などの理由から持続動詞が複数個並存していることもある。持続動詞は自動詞からも他動詞からも作られるが、できあがった持続動詞は常に自動詞である。たとえば、har-ize「頼む」は他動詞であるが、この動詞から作られたhar-de-zeは自動詞である。また、全ての動詞から持続動詞が作られるわけではなく、持続動詞を作ることができない動詞もたくさんある。

持続動詞について簡単に説明したが、進行相を形容詞的分詞の未来時制形を用いて表す動詞にはとても多くの持続動詞が含まれている。以下では、持続動詞の作り方ごとに話を進めて行く。

3.2.1 E型屈折語尾

持続動詞を作るのに最もよく使われる方法は、I型あるいはIN型の屈折語尾を取る動詞の屈折語尾をE型に変える方法である。たとえば、基本となる動詞kunč'ize「光る」はI型の屈折語尾を取るが、この屈折語尾をE型に変更することによって、持続動詞kenč'ezeが作られる。ただし、I型あるいはIN型の屈折語尾をE型に変更する場合には基本となる動詞の語幹の最終母音が/i/か/u/だと/e/に変わってしまうため、kunč'がkenč'に変わっている。進行相形で使われている動詞の数もこのタイプの持続動詞が最も多く、次の50動詞である。kenč'eze (17:34), k'et'eze (13:15), ber-eze (0:18), helč'eze (2:10), parq'eze (2:9), k'anc'eze (9:1), tenk'eze (8:2), t'erk'eze (8:0), sent'eze (5:1), ħens-eze (3:3), ter-eze (5:0), heššt'eze (2:3), zwanǵ'eze (3:0), q'ap'eze (3:0), parx'eze (2:1), çwaƒ'eze (2:1), henƒ'eze (2:0), ƒab'eze (2:0), penšš'eze (2:0), twarx'eze (2:0), xap'eze (2:0), ħenč'eze (2:0), čwarq'eze (2:0), čer'eze (2:0),

hank'eze (1 : 0), ženk'eze (1 : 0), zvarǵ'eze (1 : 0), zvarx'eze (1 : 0), zenk'k'eze (1 : 0), q'anšš'eze (1 : 0), q'wak'eze (1 : 0), řenk'eze (1 : 0), peššt'eze (1 : 0), terk'eze (1 : 0), terx'eze (1 : 0), t'ek'eze (1 : 0), xep'eze (1 : 0), řwank'eze (1 : 0), c'enk'eze (1 : 0), řwalx'eze (1 : 0), řenq'eze (1 : 0), ššap'eze (1 : 0), erǵ'eze (1 : 0), řenč'eze (0 : 1), q'enk'eze (0 : 1), řab'ǵ'eze (0 : 1), penq'eze (0 : 1), t'er'eze (0 : 1), qeššt'eze (0 : 1), řenk'eze (0 : 1)。全動詞の使用例を合計すると、進行相形に形容詞的分詞の未来時制形を用いているのは 119 例であり、現在時制形を用いているのは 105 例である。

3.2.2 -d+I 型屈折語尾

母音終わりの語幹を持つ動詞は、接辞 -d と I 型の屈折語尾の組み合わせか、後で述べる接辞 -dar と I 型の屈折語尾の組み合わせで持続動詞が作られる。たとえば、基本となる動詞 soro-ze「震える」の語幹に接尾辞 -d を付けることによって I 型の屈折語尾を取る持続動詞 soro-d-ize が作られる。I 型の屈折語尾を取る動詞でも少なくともはあるが接辞 -d と I 型の屈折語尾の組み合わせで持続動詞を作る動詞がある。たとえば、řur-ize「回る」から řur-d-ize ができる。接辞 -d の前に母音 a あるいは u が入ることがある。qiršš-ize「ほじくり回す」から持続動詞 qiršš-ad-ize が作られるが、接辞は単なる -d ではなく -ad である。また、uh-ize「せきをする」には接辞 -ud が付き持続動詞 uh-ud-ize ができる。E 型の屈折語尾を取る動詞で持続動詞を作ることができる動詞は、he-q'eze「飲む」、c'exx'eze「尋ねる」、čeq'eze「皮をむく」の 3 動詞で、全て、接辞 -old を付加して作られ、heq'-old-ize, c'ex-old-ize, čeq-old-ize となる。母音語幹の動詞から接辞 -d と I 型の屈折語尾の組み合わせで作られた持続動詞で進行相形で現れる動詞を全て挙げると、soro-d-ize (17 : 21), q'ač'a-d-ize (2 : 4), ř'uč'a-d-ize (3 : 0), qwař'a-d-ize (2 : 0), hak'k'a-d-ize (1 : 1) である。I 型の屈折語尾を取る動詞に接辞 -d が付いてできる I 型の屈折語尾を取る持続動詞で進行相形で使われているのは řur-d-ize (3 : 21), uh-

d-ize (8 : 8), swer-d-ize (1 : 3), AM-aĵar-d-ize (1 : 0) である。接辞 -d の代わりに接辞 -ad が使われている動詞では, hes-ad-ize (3 : 0), qiršš-ad-ize (3 : 0) で, 接辞 -ud が使われている動詞では ha-AM-ud-ize (3 : 0) である。E 型の屈折語尾を取る動詞から接辞 -old を使って作られて持続動詞で進行相形で使われているのは, heq'-old-ize (1 : 2), c'ex-old-ize (0 : 3), čeq-old-ize (0 : 1) である。接辞 -ad, -ud, -old を接辞 -d の一種であると考えられることにすると, 進行相形に形容詞的分詞の未来時制形を用いているのは 48 例であり, 現在時制形を用いているのは 64 例である。

3.2.3 -d+E 型屈折語尾

I 型の屈折語尾を取る動詞から接辞 -d と E 型の屈折語尾の組み合わせでも持続動詞が作られる。たとえば, aĥ-ize 「叫ぶ, 呼ぶ」の語幹に接辞 -d が付き, E 型の屈折語尾を取る持続動詞 aĥ-d-eze が作られる。aĥ-d-eze はこのグループの中で少し特殊で, aĥ-d-eze の代わりに aĥ-t'-eze が使われることがある。すなわち, 接辞 -d のかわりに同じ目的で接辞 -t' が使われることがある。aĥ-d-eze 以外で接辞 -d のかわりに接辞 -t' が用いられる動詞はない。接辞 -d あるいは -t' と E 型の屈折語尾の組み合わせでできた持続動詞で進行相形が使われている動詞は, aĥ-d-eze (14 : 31), hal-d-eze (2 : 25), har-d-eze (7 : 8), žen-d-eze (1 : 1), ʔwah-d-eze (1 : 4), xap-d-eze (1 : 2), çan-d-eze (9 : 4), ĥap-d-eze (8 : 1), c'al-d-eze (1 : 5), čwer-d-eze (0 : 2), laʔ-d-eze (0 : 1), aĥ-t'-eze (3 : 14) である。進行相形に形容詞的分詞の未来時制形を用いているのは 47 例であり, 現在時制形を用いているのは 98 例である。

3.2.4 -ar+I 型屈折語尾

I 型か IN 型の屈折語尾を取る動詞から接辞 -ar と I 型の屈折語尾の組み合わせで作られる持続動詞もある。このパターンで作られる持続動詞はとても多い。このタイプの持続動詞で進行相形で現れているのは, AM-axč-ar-ize (8 : 3), maĥ-ar-ize (3 : 3), AM-akk-ar-ize (1 : 3), hed-ar-ize (2 : 1),

het'-ar-ize (2 : 0), AM-uq'-ar-ize (0 : 2), AM-aq'-ar-ize (1 : 0), AM-ec'c'-ar-ize(1 : 0), AM-ik'-ar-ize(1 : 0), AM-orɫ'-ar-ize(1 : 0), AM-uḥ'-ar-ize (1 : 0), ɫalq'-ar-ize(1 : 0), hiq'-ar-ize(1 : 0), rečč'-ar-ize(1 : 1), ḥinq'-ar-ize (1 : 0), AM-ič'-ar-ize (0 : 1), ḥens-ar-ize (1 : 0), AM-eh-ar-ize (0 : 1), AM-eɫ'-ar-ize (0 : 1), žink-ar-ize (0 : 1), punšš'-ar-ize (0 : 1), ččuk'-ar-ize (0 : 1) である。合計すると、形容詞的分詞の未来時制形が 26 例で、現在時制形が 19 例で使われている。

3.2.5 -ard+I 型屈折語尾

I 型か IN 型の屈折語尾を取る動詞に接辞 -ard が付いて I 型の屈折語尾を取る持続動詞が作られることがある。接辞 -ard と I 型の屈折語尾の組み合わせで持続動詞を作ることを許す動詞は、接辞 -ar と I 型の屈折語尾の組み合わせでも持続動詞を作ることができる。接辞 -ar のほうが接辞 -ard よりも多く使われる。接辞 -ard を使った持続動詞で進行相形で使われているのは、AM-uq'-ard-ize(13 : 4), hiq'-ard-ize(6 : 2), AM-ik'-ard-ize(6 : 1), xis-ard-ize (1 : 3), hes-ard-ize (1 : 2)], q'oč'-ard-ize (1 : 1), k'wek'-ard-ize (1 : 0), k'ič'-ard-ize(1 : 0), maɫ'-ard-ize(1 : 0), čč'ik'-ard-ize(1 : 0), kenč'-ard-ize (1 : 0), k'es-ard-ize (1 : 0), AM-ecc-ard-ize (0 : 1) である。合計すると、形容詞的分詞の未来時制形が 34 例で現在時制形が 14 例で使われている。

3.2.6 -dar+I 型屈折語尾

母音で終わる語幹を持った動詞、I 型の屈折語尾を取る子音で終わる語幹を持った動詞から接辞 -dar と I 型の屈折語尾の組み合わせで作られる持続動詞もあるが、その数はとても少ない。このタイプの動詞で進行相形が現れているのは、qwa-dar-ize (3 : 2), pu-dar-ize (1 : 0), kak-dar-ize (1 : 0), rex-dar-ize (1 : 0) である。合計すると、形容詞的分詞の未来時制形が 6 例で、現在時制形が 2 例で使われている。

3.2.7 a(n)q+I 型屈折語尾

I 型あるいは IN 型の屈折語尾を取る動詞に接辞 *-anq* が付加されて持続動詞が作られることもある。同じ動詞に接辞 *-anq* の代わりに接辞 *-aq* が付くこともある。接辞 *-anq* が付いてできた動詞で進行相形が使われている動詞は、AM-*eł-anq-ize* (9 : 6), AM-*ort-anq-ize* (9 : 2), AM-*orž-anq-ize* (3 : 2) であり、合計すると、形容詞的分詞の未来時制形が 21 例、現在時制形が 10 例である。*-anq* の代わりに *-aq* が使われている動詞では、AM-*ort-aq-ize* (1 : 0) だけである。

3.2.8 a(n)qd+I 型屈折語尾

接辞 *-aqd* も I 型あるいは IN 型の屈折語尾を取る動詞に付加され持続動詞が作られる。接辞 *-aqd* が付く動詞に、*-aqd* の代わりに *-anqd* が現れることもある。接辞 *-aqd* が付いてできた動詞で進行相形が使われているのは、AM-*alah-aqd-ize* (3 : 3), AM-*eker-aqd-ize* (5 : 0), *q'warił-aqd-ize* (0 : 2), *ʕedeʕ-aqd-ize* (1 : 0), *t'ur-aqd-ize* (1 : 0), AM-*ağar-aqd-ize* (0 : 1), *ge-AM-erg-aqd-ize* (0 : 1), *halak-aqd-ize* (0 : 1) であり、合計すると、形容詞的分詞の未来時制形が 10 例で、現在時制形が 8 例で使われている。

3.2.9 まとめ

3.2.1 から 3.2.8 までに述べた持続動詞の進行相形における形容詞的分詞の未来時制形と現在時制形の使用を表 1 にまとめる。持続動詞全体では、進行相形を表現するのに形容詞的分詞の未来時制形が 312 例で用いられていて、現在時制形が 320 例で用いられている。未来時制形と現在時制形の相対的な使用頻度はほぼ五角である。個別的には、3 番目の接辞 *-d* と E 型屈折語尾の組み合わせでの未来時制形の使用頻度が結構低いが、3.4 で述べる動詞と比べると誤差の範囲かもしれない。

表 1

	未来時制形	現在時制形
E 型屈折語尾	119 (53%)	105 (47%)
-d+I 型屈折語尾	48 (43%)	64 (57%)
-d+E 型屈折語尾	47 (32%)	98 (68%)
-ar+I 型屈折語尾	26 (58%)	19 (42%)
-ard+I 型屈折語尾	34 (71%)	14 (29%)
-dar+I 型屈折語尾	6 (75%)	2 (25%)
-a(n)q+I 型屈折語尾	22 (69%)	10 (31%)
-aqd+I 型屈折語尾	10 (56%)	8 (44%)
合計	312 (49%)	320 (51%)

3.3 名詞あるいは形容詞から派生した動詞

アバール語には名詞あるいは形容詞から派生した動詞が存在する。たとえば、動詞 *zigar-d-ize* 「不平を言う」は名詞 *zigar* 「不平」に接辞 *-d* が付加してできた I 型の屈折語尾を取る動詞である。アバール語には名詞に接辞 *-d* を付加して作られた I 型の屈折語尾を取る動詞がいくつかある (Alixanov 1994: 129-130)。また、形容詞に接辞 *-d* が付いてできた I 型の屈折語尾を取る動詞、接辞 *-d* が付いてできた E 型の屈折語尾を取る動詞、接辞 *-dar* が付いてできた I 型の屈折語尾を取る動詞が少数個ある。名詞および形容詞から動詞を作ろうとした方法は、基本となる動詞の語幹から持続動詞を作る方法の一部と同じである。このようにして名詞あるいは形容詞から作られた動詞も進行相を形容詞的分詞の未来時制形と存在動詞の組み合わせで表現していることがある。

名詞に接辞 *-d* が付加してできた I 型の屈折語尾を取る動詞で進行相形で現れているのは、*zigar-d-ize* 「不平を言う」(6:8)、*waswas* 「疑い」から作られた *waswas-d-ize* 「疑う」(4:4)、*c'oh* 「泥棒」から作られた *c'oho-d-ize* 「泥棒をする」(1:0) がある。このタイプの名詞由来の動詞で進行相を表すのに形容詞的分詞の現在時制形だけしか使っていない動詞はない。

一方、形容詞に接辞 *-d* が付加してできた I 型の屈折語尾を取る動詞で進行相形で現れているのは、*req'a-AM* 「びっこの」からできた *req'd-ize* 「びっこ

を引いている」(3:0)と čaluq-a-AM「色っぽい」からできた čaluq-d-ize「色っぽく振る舞う」(1:0)である。形容詞に接辞 -d が付加してできた E 型の屈折語尾を取る動詞で進行相形で現れているのは, req'a-AM「びっこの」からの req'd-eze「びっこを引いている」(1:0)だけである。req'a-AM から作られた動詞には req'd-ize, req'd-eze, req'dar-ize があるが, 私が調べた 18 冊の本の中で req'd-ize が 13 回使われているのに対して, req'd-eze, req'dar-ize の使用例はそれぞれ 1 例である。したがって, req'd-eze の使用例は進行相を表すために使われている形容詞的分詞の未来時制形の 1 例だけである。形容詞に接辞 -dar が付加してできた I 型の屈折語尾を取る動詞で進行相形で現れているのは, ššak-a-AM「疑わしい」からの ššak-dar-ize「疑う」(9:5), goh-a-AM「わがままな」からの goh-dar-ize「わがままに振る舞う」(3:3), xex-a-AM「速い」からの xex-dar-ize「急ぐ」(2:2)である。

名詞, 形容詞に接辞 -d あるいは -dar が付加してできた動詞の進行相形における形容詞的分詞の未来時制形と現在時制形の使用数をまとめると表 2 のようになる。

表 2

	未来時制形	現在計
名詞 + -d + I 型屈折語尾	11 (48%)	12 (52%)
形容詞 + -d + I 型屈折語尾	4 (100%)	0 (0%)
形容詞 + -d + E 型屈折語尾	1 (100%)	0 (0%)
形容詞 + -dar + I 型屈折語尾	14 (58%)	10 (42%)

基本となる動詞から持続動詞を作るのに使う接辞とは違う接辞を使って名詞から動詞を派生させることがある。名詞に接辞 -g をつけて IN 型の屈折語尾を取る動詞を作ることがあり, 意味は「当該名詞がいっぱいになる」あるいはそれからの比喩的な意味になる。この接辞で作られる動詞はごく少数である。このタイプの動詞も進行相を表すのに形容詞的動詞の未来時制形が使われている。このタイプの動詞で進行相形で現れているのは, k'k'uj「煙」か

らできた k'k'ujda-ǰ-ine「煙る」(3:0), hač'u「唾」からできた hač'i-ǰ-ine (1:0), mac'「舌」からできた mač'i-ǰ-ine「悪口を言う」(0:1), cer「きつね」からできたと考えられる cara-ǰ-ine (0:1) である⁵。

接辞 -x も接辞 -ǰ と同じく名詞に付き IN 型の屈折語尾を取り (Alixanov 1994: 121-122), 「当該名詞がいっぱいになる」あるいはそれからの比喩的な意味を持つ。接辞 -x が付く名詞はそんなに多くないが接辞 -ǰ よりも多くの名詞に付く。名詞に接辞 -x が付加されて作られた動詞で進行相形で使われている動詞では, ccin「怒り」からできた ccida-x-ine「怒る」(0:3), karačel「波」からできた karačala-x-ine「波立つ」(0:1), c'unc'ra「蟻」からできた c'unc'ra-x-ine「鳥肌が立つような感じになる」(0:1), ššeq'er「のど」からできた ššaq'ra-x-ine「泣きそうになる」(0:1) があるが, 形容詞的分詞の現在時制形が 6 回使われているのに対して, 未来時制形は 1 度も使われていない。接辞 -ǰ と接辞 -x が付加されてできた動詞の進行相形での形容詞的分詞の未来時制形と現在時制形の使用を表 3 にまとめて示す。

表 3

	未来時制形	現在時制形
名詞+ -ǰ+IN 型屈折語尾	4	2
名詞+ -x+IN 型屈折語尾	0	6

名詞に接辞 -x が付いてできた動詞の進行相形で形容詞的分詞の未来時制形が使われていないことをどう解釈していいのかは, 全体の使用例が 6 例しかないため, 今のところ判断を保留するしかないであろう。

⁵ 動詞 hač'i-ǰ-ine は Muḥamad Šamxalow が一度使っているだけで, 「口を唾でいっぱいにする」という意味ではと思われる。また, 動詞 cara-ǰ-ine は Ťumar-Haži Šaxtamanow が一度使っているだけであり, 意味はわからない。

3.4 残りの動詞

反復擬音動詞，持続動詞，名詞および形容詞から派生した動詞の進行相形が形容詞的分詞の未来時制形をよく使うことを述べた。それ以外の動詞で進行相形を作るときに形容詞的分詞の未来時制形を使っている例がある動詞は表4のようになる^{6,7}。

表4

	未来時制形	現在時制形
1. q'erl'-eze 「争う」	1(3%)	35(97%)
2. xen-eze 「動き回る」	3(27%)	8(73%)
3. ššen-eze 「(雨が)しとしと降る」	3(60%)	2(40%)
4. q'en-eze 「黙っている」	3(100%)	0(0%)
5. ġen-eze 「落ちる」	1(50%)	1(50%)
6. šešk'-eze 「あちこち探す」	1(100%)	0(0%)
7. ʔod-ize 「泣く」	30(34%)	57(66%)
8. ɕwad-ize 「進む, 向かう」	8(9%)	79(91%)
9. AM-asand-ize 「遊ぶ」	6(33%)	12(67%)
10. qud-ize 「騒音をたてる」	1(8%)	11(92%)
11. sud-ize 「ひりひりする」	4(40%)	6(60%)
12. inahd-ize 「思い焦がれる」	4(57%)	3(43%)
13. q'acan-dize 「争う」	4(80%)	1(20%)
14. swad-ize 「うとうとする」	1(50%)	1(50%)
15. garač'war-ize 「しゃべる」	1(20%)	4(80%)
16. ine 「行く」	40(5%)	759(95%)
17. AM-ač'-ine 「来る」	87(17%)	412(83%)
18. AM-ağ-ize 「争う」	9(7%)	115(93%)
19. unt-ize 「痛む」	9(20%)	36(80%)
20. halt'-ize 「働く」	7(2%)	302(98%)
21. quršš-ize 「ほじくる」	1(33%)	2(67%)

どの動詞も他の単語から派生した動詞ではない。表4を見て気づくのは反復

⁶ 動詞 ine は語幹を持たず，屈折語尾からだけなる動詞である。

⁷ 動詞 q'en-eze は Muhamad Sulimanow が3回使っているだけであり，意味は文脈から「黙っている」と予測される。

擬音動詞、持続動詞、名詞および形容詞から派生した動詞と音韻的に似ている動詞が多いことである。1～6の動詞はE型の屈折語尾を取る動詞である。8～14の動詞は語幹が子音dで終わっていてI型の屈折語尾を取る動詞である。15の garačwar-ize は語幹が ar で終わっていてI型の屈折語尾を取る動詞である。どれも上で述べた持続動詞で見られるパターンであり、反復擬音動詞も子音dで終わるし、名詞および形容詞から派生した動詞にも子音dで終わる動詞がある。15の garačwar-ize は gar-ize から語幹の gar を反復して二番目の gar の最初の子音をどに変えた動詞である。こうしたパターンを取る動詞は多くあり、反復される語幹の先頭の子音は別の子音に変えられるが、子音どが使われることが多い。したがって、garačwar-ize の元となる動詞 gar-ize から判断して、ar が接辞である可能性はないが、1～14の動詞の場合、もともとはなんらかの基本となる動詞から派生した持続動詞であり、その基本動詞が使われなくなった可能性もある。また、名詞あるいは形容詞から派生した動詞である可能性もある。どちらにしても、持続動詞等との音韻的な類似が形容詞的分詞の未来時制形を使った進行相形の使用を誘発している可能性は大きいと思われる。それ以外の16～21の動詞は持続動詞等とは違ったパターンをしている。こうした動詞の進行相形が形容詞的分詞の未来時制形を使う動機付けははっきりしない。しかし、こうした動詞の進行相形が形容詞的分詞の未来時制形を用いている頻度は反復擬音動詞、持続動詞、名詞および形容詞から派生した動詞と比べて比較にならないほど低いことは表4を見て明らかである。ところで、意味を持っているのかどうかは不明であるが、表4の動詞のうちで、持続動詞が作られるのは21番目の quršš-ize 「ほじくる」だけである。それ以外の動詞は対応する持続動詞を持っていない。

4. 個人差

アパール語は山岳地帯で話されていることもあり、方言間でいろいろと大きな違いがある。標準語でも方言からの影響と考えられる作家間での差がい

ろいろな点で多く見られる。進行相動詞が形容詞的分詞の未来時制形を用いて作られることがあることを述べている文献は見あたらないことから、標準語とかなり違っている方言が話されている地域出身の作家が形容詞的分詞の未来時制形を用いた進行相動詞を使っている可能性もある。そこで、形容詞的分詞の未来時制形を用いた進行相動詞の作家別の使用状況を表5に示す。

表5

作家	作品の略号	未来時制形の使用数
Daganow, ʕabdula	DG-G	6
Dadaew, Jusup	DJu-A	1
ǧalbac'ow, ǧazimuḥamad	GG-G	89
Murtazaliewa, Pat'imat	MP1-S, 2-K	19+47=66
Muḥamadow, Musa	MM1-B, 2-G	4+24=28
Rasulow, ʕarip	RG1-G, 2-A, 3-U	58+32+67=157
Šaxtamanow, ʕumar-Ḥaži	ShG-K	36
Šamxalow, Muḥamad	ShM1-Ts, 2-K	21+40=61
Sulimanow, Muḥamad	SIM-L	95
Surxaew, Musalaw	SrM1-N, 2-T, 3-A	27+41+38=106
Hažiew, Husen	XX-B	10

表5が示しているように、形容詞的分詞の未来時制形を用いた進行相動詞を使用していない作家はいない。作家の出身地はごく一部だけしか明らかでないが、現段階では、表5の結果を地域差に結びつけるのは難しいように思える。また、私が調べていない作家で形容詞的分詞の未来時制形を用いた進行相形を使わない作家がいる可能性はあるが、そうした作家が多数派であることはないであろう。Jusup Dadaewの形容詞的分詞の未来時制形を用いた進行相動詞の使用が1例しかないことは注意する必要があるかもしれない。その1例はçwad-izeである。上で述べた形容詞的分詞の未来時制形を用いて進行相形を作ることがある動詞の中でJusup Dadaewが形容詞的分詞の現在時制形を用いて進行相形を作っている動詞は次の通りである。反復擬音動詞の進行相形は使われていない。持続動詞ではkenč'-eze(0:4), ber-eze(0:

2), ah-d-eze (0 : 2), xis-ard-ize (0 : 1) で、形容詞的分詞の現在時制形だけが全部で9例使われている。名詞あるいは形容詞からの派生動詞は進行相形で使われていない。残りの動詞は qerʼ-eze(0 : 4), ššen-eze(0 : 1), ʔod-ize(0 : 1), ɕwad-ize(1 : 4), AM-aǧ-ize(0 : 39), unt-ize(0 : 1), haltʼ-ize(0 : 17), ine (0 : 44), AM-ačʼ-ine (0 : 29) である。持続動詞が9例あるので、1例ぐらいは形容詞的分詞の未来時制形を用いた進行相動詞の使用があってもよさそうであるが、この作家が他の作家と比べて形容詞的分詞の未来時制形を用いた進行相動詞をあまり使わないと見なせるかはこれだけのデータでは微妙なところである。

5. おわりに

本稿で述べたことをまとめると次のようになる。進行相を表すのには、形容詞的分詞の現在時制形と存在動詞 AM-ukʼ-ine「ある、いる」の組み合わせを用いるのが一般的であるが、形容詞的分詞の現在時制形の代わりに未来時制形が使われることもある。進行相を形容詞的分詞の未来時制形を使って表現する動詞はごく一部の自動詞に限られている。反復擬音動詞、持続動詞、名詞や形容詞から派生した動詞は進行相を表すのに形容詞的分詞の未来形と現在形を同じ程度使っている。それ以外にも進行相を形容詞的分詞の未来時制形を用いて表すことがある動詞はあるが、そうした動詞は形容詞的分詞の現在時制形を未来時制形と比べて圧倒的に高頻度で用いる。私が調べた範囲では、形容詞的分詞の未来時制形を用いた進行相を使っていない作家はいないので、形容詞的分詞の未来時制形の使用が一部の個人に限定されているとは考えられない。

調査に使用したアバール語の本とその略号

[DG-G] Daganow, ʔabdula, 1997. ʔadamal — dir cʼwabi. Maxachkala.

- [DJu-A] Dadaew, Jusup, 1998. Ahul goñ — dir rek'el buhi. Maxachkala: Jupiter.
- [GG-G] Ğalbac'ow, Ğazimuĥamad, 1994. Ganč'al. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- [MP1-S] Murtazaliewa, Pat'imat, 1990. Surat. Maxachkala: Daguchpedgiz.
- [MP2-K] Murtazaliewa, Pat'imat, 1995. Kulakasul jas. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- [MM1-B] Muĥamadow, Musa, 1985. Biharodul ğut'bi. Maxachkala: Daguchpedgiz.
- [MM2-G] Muĥamadow, Musa, 1991. Goro-c'er balelde cebe. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- [RG1-G] Rasulow, Ğarip, 1996. Ğadamalgi raĞadalgi. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- [RG2-A] Rasulow, Ğarip, 1996. Aniššaŭal c'wajalda xadur. Maxachkala: Daguchpedgiz.
- [RG3-U] Rasulow, Ğarip, 2006. Uzdenal. Maxachkala: Lotos.
- [ShG-K] Šaxtamanow, Ğumar-Ĥaži, 1994. Q'aral Ğor. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- [ShM1-Ts] Šamxalow, Muĥamad, 1982. C'udul was. Maxachkala: Daguchpedgiz.
- [ShM2-K] Šamxalow, Muĥamad, 2002. Q'isabi wa xarbal. Maxachkala.
- [SIM-L] Sulimanow, Muĥamad, 1958. Łabgo q'isa. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- [SrM1-N] Surxaew, Musalaw, 1990. Nux bit'agi. Maxachkala: Daguchpedgiz.
- [SrM2-T] Surxaew, Musalaw, 1994. Tusnaqazda GULAGalda. Maxachkala: Jupiter.

[SrM3-A] Surxaew, Musalaw, -. Awaragasul xalʕat. Maxachkala: Jupiter.

[XX-I] Ғаҙиев, Ғусен, 1995. Imam Ғамзат. Maxachkala.

参考文献

- Alekseev, M. E. & B. M. Ataev (1997) *Avarskij jazyk*. Moskva: Academia.
- Alixanov, S. Z. (1994) Slovoobrazovanie v avarskom jazyke. Kandidatskaja dissertatsija. Maxachkala: Institut Jazyka, literatury i iskusstva DNTs PAN.
- Madieva, G. I. (1980) *Morfologija avarskogo literaturnogo jazyka*. Maxachkala: Daguchpedgiz.
- Nurmagomedov, M. M. (1992) Morfologičeskaja struktura glagola v avarskom jazyke. Kandidatskaja dissertatsija. Maxachkala: Institut Jazyka, literatury i iskusstva DNTs PAN.
- Saidov, M. (1967) *Avarsko-russkij slovar'*. Moskva: Sovetskaja Ėntsiklopedija.